

## 松田解子—人と文学—(二)

### “おりん”三部作を中心に

渡邊 澄子

## Tokiko Matsuda—Her Life and Works—(2)

### With focus on the trilogy of “Orin”

Watanabe Sumiko

#### はじめに

松田解子(一九〇五—二〇〇五)の代表作は『おりん口伝』と評価が定着している。だが、私はこの評価にいささか疑義を持つ。そこで、本紀要前号の続稿として『おりん口伝』を中心に『おりん母子伝』『桃割れのタイピスト—続おりん母子伝—』にも触れ、いわゆる「おりん三部作」によって、再度、松田解子について論じてみたい。

これらの作品を読む上で重要なのは執筆、発表時期である。そこで、初出と初刊について明示しておきたい。『おりん口伝(上)』第一章から第四章までが『文化評論』一九六六年一月号、(下)の第五章から第八章が同誌二月号に発表され、この約五〇〇枚に五〇枚ほどが加筆され、全九章が『おりん口伝』として新日本出版社から単行出版されたのは一九六六年五月である。これを第一部として第二部が「続おりん口伝」として『民主文学』一九六七年一月から十二月まで約七二〇枚を第一章から第十二章・終章として発表、合本『おりん口伝』の新日本出版社からの刊行は一九七四年一月である。第二部連載中の一九六七年、(上)に第八回田村俊子賞、(正・続)に、一九六九年、第一回多喜二・百合子賞が授賞されている。また、一九六八年に東京芸術座第二二回公演、同年の関西芸術座、一九七二年に「続おりん口伝より」として再度東京芸術座が第三三回公演で舞台化、上演されていて、近年では二〇〇六年一〇月二二日に、大仙市「和ピア」で朗読「おりん口伝」が公演されている。

『おりん口伝』の続編となる『おりん母子伝』は第二章第二部までの約七〇枚を『民主文学』一九七四年三月号に発表後、約二五〇枚を追加し

て七四年一月、新日本出版社から刊行され、そのまた続編となる『桃割れのタイピスト』は、一九七六年六月から翌年五月まで『文化評論』に連載（約六〇〇枚）、七七年七月、新日本出版社から刊行されて（おりん三部作）は（完）となった。解子五〇歳から七七歳まで約二二年をかけた三〇〇〇枚の大作である。三部作の時代背景は一九〇〇年の秋から一九二三年の春浅き頃までで、日露戦争前からアジア・太平洋戦争突入準備期に当たる日本近代資本主義が帝国主義化していく時代の流動期である。

おりん三部作は解子の母をモデルとしたおりんが、当時蔑視されていた鉱夫の許に「嫁入り」するところから始まり、その娘である作者がモデルのひろが鉱山事務所の小使い待遇のタイピストとして働いた時期までが描かれた作品で、荒川鉱山（実名）の鉱夫の世界を描いた鉱山小説である。日本近（現）代女性作家として松田解子は代表的地位に立つ作家とはかならずしも言えないが、鉱山小説における女性作家として第一人者であることに異論はないだろう。鉱山はこの時代、戦争と密着した資源の供給源として極めて重要な役割を担っていた。しかも鉱山で働く労働者は、小作農農家の次男三男および凶作などで「食い詰めた」農夫や極貧層の「流れ者」と言われた人たちが生きる糧を求めて行き着いた者が多かった。極貧の「百姓」にすら馬肉貝焼（なんこかやま）と貶められていたが、役馬の死肉を貝焼（かやま）にして食べるような身分という蔑称である。彼らは、労働者の人権無視の遅れた地方にあって、二重にも三重にも巧妙に搾取される仕組みのなかで奴隷労働に甘んじさせられていた。三部作は、階級社会変革を求める先鋭的政治的視点から、常態化された搾取構造に労働者が覚醒して、粘り強い闘いに進み出るその意識の覚醒過程を詳細に跡づけたものとして小説化されている。

## 『おりん口伝』

### 1

松田解子はこの作品に着手するまでの自分を作家ではなく、足家（あそ）だったと語っている。作品の起筆は一九五五年だが、かなり前から周到な準備にかかっていたことは残された二〇冊のノートが顯示する。プロレタリア文学作家として作家の道に進むことになった経歴は前号で述べたが、鉱夫の子として生まれ育った解子が労働運動に飛び込むのは時代性もあるが解子にとっては自然な道筋だった。アナキストからマルキシストに変わった夫と共に権力に立ち向かう運動に解子は挺身していた。一九三六年、秋田県尾去沢鉱山での鉱滓ダム決壊を知ると駆けつけ、その見聞を優れたルポルターージュとして発表した。戦争下の忸怩たる思いは、新時代を招来した戦後文学の代表作と位置づけたい花岡鉱山事件を描いた『地底の人々』によって作家・松田解子の名を文学史上に留めることになる。『地底の人々』は『おりん口伝』の水源と言える。私の松田解子文学評価は『地底の人々』を最高位とする。合本『おりん口伝』の「あとがき」は、

おりんのように生まれつき、おりんのように生き凌いだ女性は、日本のいたるところにあったのではないでしょうか。わたしはそういう女性像をいつかは描いてみたいと、ゆめみてきました。

「おりん口伝」は、そういうわたしの願望から出発したのでした。

で書き出されている。この「願望」を温めはじめたのは一九三二年頃と思われる。次男出産後、無産者産児制限運動の中心活動家になっていたが、『女人芸術』で出会ったらしいプロレタリア文学作家・若杉鳥子（一八九二〜一九三七）の紹介で『火の鳥』に小説「卵」が載ったのを機縁にこの先輩作家と親交を持つようになる。「おれの苦労は馬で一駄ある」と溜息をついていた母について語った解子に、お母さんのこと、おつかない三人目のお父さんやその外の人たちのこと思いつき書きなさいよ、ああ、あなたに時間をあげたい、と言われたのが励みになるが、まだ機は熟さない。本気の踏み出しは、戦後、解子が江口渙の見舞に病院に行ったとき出会った手塚英孝に何か書きなさいよと声をかけられ、「馬で一駄」の母の話をする、荒々しい命令口調で「あんたそれ書きなさい」と言われたことによるという。

ところで、松田解子（本名ハナ）の母松田スエは一八七四（明治7）年八月二日生まれだが、作中のおりんは実在したスエの実父萬次郎の妹リ（一八七八年五月七日生まれ）の名と生年（『自選集』第二巻、江崎淳「解説」）を使っている。「社会活動の面などは何一つ持たなかった」母を階級的に目覚めた闘う女性に造型するために、社会的・政治的諸事実と整合性を持たせる必要があったからと推測される。共産党員（一九四六年二月入党）だった解子は時まさに政治的時節にあつて、それを前面に押し出す使命感を持ったのだろう。多喜二・百合子賞受章に際して、当時、日本共産党中央委員会文化部長だった蔵原惟人は次のような評言を述べている。

この作品は、日露戦争前後の日本の資本主義が、権力の厚い保護を受け、労働者、農民の血を吸って肥え太っていった様相を鉱山の現場にとらえていきいきとえがきだしています。また過酷な鉱山労働者のなかで、資本とのたたかひの第一線に立つことをしだいに余儀なくされ、階級的に目ざめてゆく労働者の姿を、足尾暴動から片山潜の指導した東京市電ストライキにいたる歴史の運動との関連で、力強くえがきだしています。はげしい収奪のもとにさまざまの恨みを残して死んでいった鉱夫たちの叫びや、そのたたかひ、わが国の労働者階級の農民との関係なども、深くえがきこまれています。わが国の文学が一人の婦人労働者の半生をこのように大きな社会背景の把握のもとにいきいきとえがきだしたのは、この作品がはじめてといってもさしつかえないと思います。松田さんの長年の創作活動との関連で見ても、わが国の労働者階級が背負っている歴史と現実をたいする深い把握や、鉱山労働者や農民の感情のひだにまでわけいつたゆきとどいた描写、個性的で情感にあふれた文体などの点で、大きな前進を示す作品になっています。（『赤旗』69・2・20）

敢えて全文を引用したのは、多数の人物が登場するかなり錯綜した筋立てのこの作品の骨格がよくまとめられていると思われたからで、この蔵

原の評価に異論はない。だが、事実としてこの鉱山労働者がここに描かれたように第一線に立つて企業資本とこれほどの闘争ができただろうか。蔵原は、マルクス主義的文芸理論家の第一人者として不動の地位に立つ不屈の闘士だが、父は惟人出生時は帝国教育会幹事長でその後は代議士として活躍した人であり、母は北里柴三郎の末妹だった。自身も東京府立一中（旧制）から東京外語大に進み、卒業後、ロシア文学研究のために『都新聞』特派員の身分を得てソビエトに渡ったエリート階級者である。峻厳な理論家であつ、人間的温かさを持つ魅力的な人だが、鉱山労働者の苛酷な生活実態には縁遠い人でもある。作家松田解子の原点が荒川鉱山にあり、松田文学の真髓が鉱山ものに發揮されていると読む私としては、蔵原評は観念的と思われる。

『おりん口伝』は社会と女性問題を剔抉した作品として評価されるが、おりんの生涯にとつて最重要人物である三人目の夫との結婚には触れられていない。「馬に一駄」の女の哀苦よりも資本家に立ち向かう労働者像を描く方に力点が置かれた作品になっている。

## 2

おりんはもと地主の末娘だったが早による凶作に火事の追ひ打ちにあい、その上、父と兄の放蕩によつて家は没落。父母が相次いで死に、実家を父の甥庄蔵とその妻ゆきが継ぐとりんは居場所を失い、三菱の雇われ馬方多吉の紹介で山を越えた荒川鉱山の、一面識もない鉱夫に嫁ぐことになる。夫となる人は東畑組を名乗る請負師の家の長男和田千治郎である。奇しくもりんと同姓の千治郎は東畑吾作の実の子ではない。吾作の妻ヨネの先夫の子である。苛酷な鉱婦労働をしてきた海千山千のヨネだが、彼女は夫と千治郎を捨て、娘ウメを連れて吾作と一緒にになり、この飯場の「お母アさん」となっているが、吾作との間にソノ、良造、トク子と三人の子がいる。千治郎の父は妻に逃げられた後、別の女と一緒にになったが千治郎はこの継母と馴染めず労働現場を転々した末に実母を頼つてこの家の人となつていて、彼の立場は微妙だった。仲人口とは違つて、意地悪い小姑ソノとりんに好色な目を注ぐソノの夫の太一、同居する千治郎の実姉ウメにも夫権吉と子がいるが、さらに、昔、吾作と親分子分の関係にあつた居候の老人とその娘サヨもいて総勢一二人家族である。加えて飯場衆が三〇人もいる大変な家だった。始めて会つた千治郎は優しく、頼りがいのある男だつたことでありんはほつとするが、不安定な立場の長男の「嫁」として途切れることのない農家とは違う雑用に振り回される。自分は道楽をし抜いてさんざん母を泣かせ、家を壊したその父の言葉をりんは思い起こす。「嫁にいつたらばなア、おりん。おなじたくあんが出たにしろ、じぶんはしつぽをとるんだぞ。罎に仕えると思つたら埒明かない。舅姑に仕えるんだ。それから小じゅうとに仕えるんだ。罎は一番さいごでええ」と言つたことを。飯場衆の扱われ方りんは驚く。窓のない大部屋に敷きつばなしの、湿つた蚤と虱の巢窟の異臭を放つ薄い布団に木枕なのだ。弁当に入れられるボタコ（塩鮭）の切身も薄い。これで苛酷な労働に耐えられるだろうか。どれほどきつい労働に明け暮れていても飯場主の東畑に上前をはねられた上、住食代を差し引かれるので過労や怪我などで働けない日があつたりすればそれが借金となり、家族への仕送りは

おろか赤字累積なのだ。りんは自分たち夫婦が家族扱いされているのが辛い。月に何度も淨勝寺の鐘の音を聞くがそれは鉦夫の死で、「ここでは三日にあげず葬式が出る」のだ。

りんの立場に同情して優しく目をかけてくれる「お母さん」たちと親しむようになって、太一の好色、それに愒気するソノに苦しむりに、東畑の家を出て鉦山働きをしながら千治郎と所帯をもてばいいと言ってくれる人がいて、りんはその話に飛びつき夫に頼む。おれはモッコかつぎの土方だし、この家は監獄部屋同然で、鉦山は怪我死人の出場所だし、お前がいつ逃げ出すかと心配だったと夫はりんを愛しげにいたわる。自分には帰る家などないと覚悟したりんに選鉦婦の仕事が与えられるが東畑の家を出ることは許されない。始めて入った坑内にりんは感動する。りんに仕事を教えた老女工は幸運にも「岩谷のおっかア」と呼ばれる名物女性岩谷タメヨでこの作品の主要人物である。選鉦婦の仕事は鉦石を割ってか、らむ(分類)作業だった。手順はハンマで叩き、カッチャでかき集め、メッキヤの簀に入れ、さらにメッキヤコで別々に鉄板の上に置くまで、それを運搬夫が運び出す仕組みである。からんだそこには何と無数の鬱金色に光る黄銅鉦の塊や虹を煮固めたような孔雀石や赤銅鉦、時には水晶石が顔を出し、真つ黄色の硫黄や鼠の歯のような「ひかり」という石や暗緑の鏡のような硫化銅などもあって、りんを興奮させた。鉦石は上鉦・中鉦・下鉦に分けられ、価値のないのがズリとして捨てられる。黒く小高いズリ山はこれの廃棄されたものだったことも知った。この作業は決して楽ではないが、狭い坑内で先輩鉦婦たちと働き、低賃金とはいえ現金が得られ、東畑の家族から離れていられる居心地のいい場所だった。帰つてからの大勢の食事の後片付けや明日の朝食の仕込み(といっても漬け物と雑葉汁だけだが)が待ちかまえていたし、朝も、仕事前の飯場衆たちの弁当つくりで忙しないが働き仲間を得たことで生き甲斐を持てた。明治三四(一九〇二)年の冬のある夜、千治郎が夜通しの夜警に出ている留守に、ソノの夫太一に犯されそうになる騒ぎを引き起こす。その時、千治郎は途中で呼び入れられた岩谷タメヨの家でタメヨと従兄妹関係にある岩谷仁衛門と会っていた。

### 3

この作品は、日本の至る所にいた「馬一駄」の苦労を重ねた女の一典型としておりんの半生を描くことを本旨としていたはずだが、松田解子の政治的立場によって労働運動を政治的・歴史的事象に絡ませてスケールを広げた二重構造になっている。解子の母その人は労働運動にも社会運動にもコミットしていない。解子の父千治郎も同様だったと思われる。だが、この作品を始めとして三部作には、一口に「日本の労働者階級」と括ってしまえない遅れた地域のそのまた下層の労働者、とりわけ女性が嘗めさせられた酷薄な「生活と人生」のその酷薄の「真因」が「日本の資本主義と当時の権力」によったことを、東北の一鉦山世界に圧縮してみせようとした意図がみられる。おりんを母の実年齢より四歳若く設定したのも、日清戦争の勝利で味をしめ、領土拡張を狙って日露戦争、さらに第一次大戦へと進む過程で戦争と密着、連動した大財閥(ここでは徹底し

て三菱だが）が国と二人三脚で成り上がっていく様相、それは残忍な人権無視の労働者搾取でもあるが、そこが詳細を極めて描かれる。鉱山労働者にとって歯の立ちようのない巨大な権力に対して執拗に立ち向かう曲折の詳述が作品を貫通する本流の観を呈しているとも言える。それは、この時代、澎湃と起こってきた社会運動の取り込みになっている。田中正造が足尾鉱毒問題に対する質問書を衆議院に提出したのは一八九一年一月で、天皇への直訴は一九〇一年一月、東京帝大生・河上肇が演説会に行つて感動したのもこの年である。岩谷仁衛門は、この鉱山の鉱毒によって田畑山林に被害を受けて困窮に追い込まれた農家の代表として、損害賠償の闘争を続ける田中正造を模した人物である。彼ら農民と共同戦線をはって、勇敢に闘う鉱夫の指導者は、会社も簡単にはクビを切れない腕のいい仕上げ工の藤田であり、サキ山の桜井である。岩谷は実在した人望の篤い人物だったらしいが、命を賭けてこのような運動をし続け、成果を上げた事実があったのだろうか。藤田は長屋の天井裏に世界文学全集を隠し持つ知識人として造型されている。『近代日本総合年表』に「南助松・永岡鶴蔵ら、北海道夕張で大日本労働至誠会を結成」(02・5・12)、「南助松、永岡鶴蔵ら、大日本労働至誠会足尾支部を結成、発会式挙行」(06・12・5)の記述に見られる日本最初の鉱山労働者団体の支部をこの鉱山に作るうとした中心的人物ともされて、永岡に指導、協力を得ているように書かれている。いわば藤田は永岡を模した人物に創られている。千治郎もその一味であり、おりんもこの仲間積極的にコミットする革命的社会派人物に仕立てられている。だが、これは明らかに虚構である。解子の「作品の堆肥づくり」(『科学と思想』75・10)の中に、「作品の堆肥として」「土中に埋められてきたもの」の「辛うじて地表に咲き出た一輪二輪」という表現があるが、鉱山労働者の酷烈な労働への苦しみと雇用者への怨み怒りの声の代弁として咲かせた作品と読み取れる。

作中、頻出する名前に永岡鶴蔵と片山潜がある。社会主義者片山潜は、一九一一年(明44)年一二月の東京市電の大ストライキを指導した人である。その片山を師とした永岡は、江崎淳によると、「若い頃は飲む、打つ、買うの放蕩」三味の鉱夫だったが、一八八七(明22)年、荒川鉱山に来てキリスト教の宣教師に出会って以後人が変わり労働運動の指導者になったのだという。永岡が坑夫のために一身を擲つ覚悟を固めて夕張から片山潜に送った手紙の写しを回し読みしてみんなは団結の意思を固める場面がある。とりわけ、りんを感動させ、勇気の出どころでリフレインされるのは次の言葉である。

一、四歳の子は養女にやる

二、八歳の子は二歳の子の守をなす

三、十歳の子は学校より戻りて菓子売りをなす

四、十三歳の子は朝夕の御飯焚を引受け通学す

五、十五歳の子は昼は機械場に労働し夜は甘酒を売る

六、妻は昼間停車場に出て荷物運搬をなし夜分は甘酒を売ること

右昨日より実行致し居候。

これは『週刊社会新聞』に永岡が発表した(08-09) 自叙伝からの引用で、資料援用によつて虚構に事実性をもたせようとしたのだろう。子や妻も民衆の一員なのに運動のためとはいえ、この苛酷さは勝手すぎると見るのは現在の視点かもしれない。

4

鉦夫組合の至誠会支部立ち上げに至る、さらにはつぶされた後の元至誠会一統を中心とした凄絶な事件を含む鉦夫の世界が、国家権力と連携した強権を誇る三菱と対峙されて縷々と描かれるが、その辺りを述べる紙幅はない。この時代、鉦山の盛衰は戦争に連動する。日露戦争は鉦山を繁盛させ、それは労働過重を招来した。保安対策を無視した利益最優先策は夥しい数の労働者を犠牲にしたが、その殆どは「本人の不注意」で片付けられ、世帯主が死ぬと、たとえ選鉦婦などで妻が働いていても、七日以内の長屋あけ渡しが会社の規則だった。居場所を失う一家の嘆きを描く場面の筆は冴えている。息子は兵隊にとられ珪肺の夫は起き上がれない。休めば無賃だ。六〇を過ぎた「ばば」が一六貫もある型鍔かたがみを荒縄で背負つて禿げ山の中腹まで運び上げる作業に就くのは「一つ運べば四銭だもの、二つ運べば八銭になるべや」の生活事情による。だが「ばば」には苛酷すぎる仕事だった。山で型鍔ごと滑り落ちて重傷を負つても「私傷」とされ、「あしたからおらゆく」と、またアメ玉に目を輝かせる孫が言う。「あえー、おらのヨシオつこが鮭の切り身とぎゃ？ あえーつ、……マユつて(元通りの身体にして)よこしてたい、マユつてけれーっ！」の悲鳴、号泣は日常茶飯事なのだ。鉦夫の子の多くは小学校尋常科を出ると幼年労働者の手子として鉦夫入りするが、一人前になつても、陽の射さない地獄の坑内、夏冬烈火と毒性の強い亜硫酸ガスの蔓延する精錬所、さては粉塵まみれの碎鉦場や選鉦場、または牛馬同様のトロッコ押しなどで、一生働いても四等米と南京米が七対三の鉦夫米がやっと食べられるだけなのだ。その挙げ句、彼らをこずく下っ端社員や会社が雇っている巡視たち、会社からも賞与を貰っている警察官に諂いながら、四十二の「厄年」を過ぎるまで生きていられれば儲けものといわれるような、「よろけ死」の珪肺死か「一発ころり」の落盤死、その他さまざまの災害死が待ち受けている。増産増産の命令叱咤は鉦夫たちを氣息奄々にさせ、鉦毒や毒煙の量産ともなつて近隣農家を死活問題に陥れる。抗議と補償要求にきた仁衛門たちは不忠者として連行される。鉦山長はじめ社員たちの豪勢さと惨めな鉦夫との対比は意図的めくが、階級社会の構造明示となつて効いている。

5

日露戦争が終結に向かうと東畑組土木工事の発注はばったり止まり、吾作は飯場を閉じる。飯場衆は「流れ者」になるが、彼らの賃金の上前を

はねて溜め込んだ金のたつぷりある吾作に生活の心配はない。千治郎はここで働くことを希望したが、藤田一味とされて採用されず、吾作の口利きでどうにか雑夫の職にありつく。雑夫とは、馬糧の馬糞の掃除から社員やその家族の雑用、社員や社への客を乗せ運ぶトロッコ押しなど、文字通りの雑役夫である。千治郎が雑夫になる少し前、日露戦争終結間近の八月二日に解子のモデルとなる女児が生まれている。名前は姑ヨネによってひろとつけられる。日露戦争の日と露からとられたこの命名は解子の思想的立場とは矛盾するが言及はない。ひろに授乳するりんの耳に「テンノーヘイカ、バンザーイ！」を連呼する提灯行列の歓呼の騒音が飛び込んでくる。この挿入に批評性は見られるものの名前はただだけない。

千治郎の急死は日露戦争終結の翌年、ひろが満一歳の誕生日を迎えて二ヶ月も経たない炎暑の日だった。千治郎はこの日、本社からのお偉いさん迎え送りの客トロッコ運搬をしていた。本社役員は人員整理問題の打ち合わせに来ていたのだった。炎天下で三里の山道を駆まで送り届けて戻った門鑑前で倒れたのだ。後に解子は過労死第一号と位置づけているが過労を素因とした熱中症と思われる。だが、作品は、千治郎を藤田一味の不穩分子として、佐野巡視が会社への忠義立てからトビグチ棒でたたきつけたのが即死の真因とされ、千治郎殺し糾弾が以後のストーリー作りになっている。

一家四人の長屋暮らしを夢見ていたおりんの夢は無惨にも最も残酷な形で打ち碎かれた上に、三菱に殺されたと喚く奴はおいておけぬとおりんは餓首された。吾作からも出て行けと言われる。千治郎没後七日にりんの実家を継ぐ甥の妻ゆきがヨネを訪ねてきて、りん親子に戻られては困る、「童子どつけて、猫っコ呉ると同じでいいすから」この鉾山のどこかに「かたづけて呉れ」と頼んだと聞き、あくまでもこの鉾山に居つく覚悟を固め、一三、四歳の娘を頭に六人の子持ちの四〇歳になるヨロケ坑夫菅井豊蔵との再婚を受け入れる。八人の子を抱え、珪肺で咳き込む夫を看取る毎日だが、我が家と呼べる長屋に住めたりんの喜びは大きい。会社に楯突いた廉でりんと共にクビ切られた岩谷タメヨの、「もういつべんあの小がらみ場で稼ぎてえな。おりんさ。足コの爪先さ鉾石ハサめてよ。こうな。ハンマこふりあげてよ、ガチツとな！ せばよ、見えねえぐらいの火花コ散ってぎらつきらって、鉾石割れてよ、なー」に、「んだんすな、お母さん、……」と心から相槌うつりん。たとえ奴隷労働でも、働く喜びが躍如たる筆で描かれていてこの作の読み所となっている。我が家と呼べる長屋に住めた喜びも束の間、珪肺病（よろけ）によって半年後、菅井は呆気なく死ぬ。会社は菅井の伯父という貧しげな農夫らしい男を呼び出し、子どもたちを引き取らせ、りんには長屋あけ渡し通告がくる。以後、千治郎殺し糾弾と絡めて死傷者その他に対する会社の対応への活劇めいた抗議闘争が延々と場面によつては息を呑むほどの迫力で、または冗長に過ぎる説明調で続くが、筋を追っている余裕はない。

多数の登場人物中、中心的英雄像とされている農民代表の岩谷仁衛門は実在の人物だが、「明治七年九月、県南平鹿群六カ村に徴兵取調忌避の一揆が起こったとき、一揆発祥の阿気村の百姓とつうじたカドで、おなじく県南横手町の当時の支庁詰官員の手に捕縛された一人であった」とい

う筋金入りの人を発展的に創りあげたと思われるが、その他の人物や闘争については虚構と事実の境界が曖昧だ。多分、虚構の方が多だろう。足尾銅山の大暴動事件は一九〇七年二月のことであるが、この年には夕張炭坑、幌内炭坑、生野鉱山、別子銅山などでも同盟罷業や暴動が起きている。そこを反映させたと思われるが秋田にこの波は押し寄せていなかったようだ。長屋を追い出されたりんは、ヨネに千太をとられ、ひろを連れて小貫飯場の住み込み女中となるが、雪が融けて人夫が去り、飯場仕事が減ると沈殿泥背負い人夫になる。事故を未然に防いで大怪我をした藤田の公傷認定要求闘争で藤田・桜井・白井が大曲署に連行され、りんも派出所に連行されて緩倉に閉じこめられる。至誠会は治安維持法違反容疑でつぶされ、拷問によって藤田は聴覚を失い、桜井は再起不能となり、白井は退山となる。

物語はドラマティックに進展する。りんは小貫や中根巡視の好色の餌食にされそうになる。作者は意識的にセクシュアルな場面を織り込むが私には贅疣に思われる。片腕を失って、「草コになつても虫コになつても」この鉱山を離れたくないと泣きながら、日三市に去つた田所がりんに恋心を打ちあげ、りんも田所に恋心を募らせたがこの鉱山を離れることはできないと抑える。小貫に沈殿泥背負いをクビ切られ、嗽沢での鉛背負いの臨時雇いになる。坑内の描写は感動的だ。岩盤の金色や銀色の鉱脈に、「豎坑百尺くだれば地獄」の恐怖と感動を覚える一方で、「坑外におとらぬ活気」を感じ、「坑内も一つの生きた娑婆世界」であることを知る。富鉱のなだれる豎坑の最低部へ雁木梯子で降りなければならぬ。半裸、全裸の男たちが鉱塊をカッチャの爪でかきよせてメッキヤで鉛箱へ詰めこんだそれを背にして、数十尺の枝坑を抜けてケージ口まで運ぶ、危険の伴う男一人前の力がある仕事だが、一箱二銭の出来高払いなので稼ぎをあげるために自分で自分を追いまくる。感動的場面だ。東畑の吾作が死に、再度、大曲署に捕らえられた藤田と桜井は讖首され、釈放間もなく桜井は死に、藤田も再起不能の生きる屍となり、仁衛門も死ぬ。明治四三年春のことである。桜井の死は、大逆事件検挙の噂が流れてきた頃のこととある。りんは鉛背負いをクビ切られタンバン仕事に変わつていった。その頃の夜半、東畑の家が火災で焼失する。良造は夜勤だったため無事だった。良造の子君雄を負つて千太は逃げられたが良造の妻は焼死、ヨネは総身の火傷で四日後狂い死ぬ。銅価が上がリだし、またこの鉱山もドンドめくぞ、と鉱山は活気を取りもどした。タンバン運びの帰りに見舞に寄つた折り、瀕死の藤田から東京で市電がストライキを決行したことをりんは知らされ、嬉しさで興奮し、叫び声をあげながら千太とひろの待つ女中部屋に走り帰るところで「おりん口伝」は終わる。

## 6

簡単にまとめてみると、歴史小説的趣を持つがこのジャンルには入らないだろう。執筆時の作者の政治的立場に立った、大資本による労働者への搾取の徹底ぶり、それに抗した労働者の不屈の闘争を意図的に前面に押し出した作品である。近代とは名ばかりの鉱山労働者の生活の実態が鉱山用語と方言によって描かれる。多くの読者にとって未知の世界であるだけに迫力があり、それだけに深い感動に衝き動かされるが、虚構性への

疑問がついて回る。明治四三年六月段階で大逆事件がこの地で話題になったとは考えられないし、新聞を読む藤田が、四四年一二月三一日に起こった市電の大ストライキを知ったとしても、それを聞いたりんの歓喜、興奮は大袈裟すぎていささかしらける。とは言え、鉾山生活をこれほどのスケールで描いた女性作家は松田解子を置いて他に見当たるまい。その点では日本近代文学の一領域において屹立する作品と言える。この作品の書かれた時節は戦後の政治の熱い季節に入っていた。労働運動も活発で同盟罷業も続出している。民主主義文学同盟の創立大会が開かれ、文学者のベトナム反戦活動も活発化した時代である。自ら「足家」とよぶような行動家として反体制運動に挺身していた解子の使命感による虚構化であり、人物の造型でもあっただろう。だが、解子の母の人生における「馬一駄」の中心人物である三人目の夫未登場のこの作品はおりん物語としては未完といえる。

### 『おりん母子伝』

『おりん母子伝』は『おりん口伝』の続編として書かれるべくして書かれた。日本全国を席捲した六〇年安保反対運動は学生運動激浪期を招来し、それは全国的反戦運動の盛り上がりとなり、公害の社会問題化、ゼネストによる空前の交通マヒ等々、激動の時代だった。解子を駆り立てたのはこの時代性であろう。松川事件や花岡事件に深く関わったことも重要な要素と言える。

作品はひろの小学校入学式当日から始まるが、作者の経歴を越境して自伝とは呼びがたい。一九二二（明治45）年四月一日は松田解子誕生的一步の日となる。師範新卒の先生に「和田ひろさん」とフルネームに「さん」をつけて呼ばれたのだ。飯場の小貫夫婦からは「役立たず」、「一文にもなりやがらないで」と言われ続けてきたひろにとって、社員の子と対等に名前を呼ばれたこの時の喜びは、ひろに人権思想を芽吹かせた。小学校に通うようになって、飼鶏の世話、水汲み、土間掃き、ランプ磨き、薪割りなどが兄妹の日課にされたのはいいとして、夜中、女中部屋に侵入してきて母を襲おうとする小貫に対する憎悪に筆が尽くされているが虚構だろう。母が頼りにしていた藤田が死んだ。選鉱場の沈殿泥処理請負にあぶれた小貫は精錬所働きに出るようになっていた。溶鉱炉の炉底で銅と廃棄物の銕からみがそれぞれの型に汲み分けられるとき、型に入らず火の粉となって散る銕の細粉（冷え固まったのがスナカス）を間断なくトロッコに入れ、それを運搬夫に渋滞なく引き渡す仕事で、一日中、亜硫酸ガスを吸い込み続ける重労働だった。苛酷な仕事の反動は帰宅後の狂的暴力となって吠え立てりんたちに火箸や灰ならしを投げつけるのだ。千太やひろにとって慣れることのできない恐怖だったが、彼の好色に感じぬりんに対してはより激しかった。天皇の重態のニュースが流れ、校長は児童に平癒祈願をさせた。天皇より目前の藤田の平癒をみんなは願ったが先に死に、待遇改善要求書を出して捕縛されていた岩谷の息子勘治たちが天皇逝去による恩赦で釈放された時、息子の出獄を待たずに母タメヨは死に、解雇もされていて長屋あけ渡しの通告がきていた。運動仲間は息子の

代になっている。ひろの先生がそつとりんに託けてくれた新聞の切り抜きは県内で起こっている労働運動の記事で、千太が宿題の教育勅語を大声で暗誦する傍らで、知らない漢字を飛ばしながら「読書百遍」するりんは嬉しさとで震える。

東北・北海道一帯の大凶作で農山村が疲弊しきっていた大正三年三月一日、まだ雪に覆われていたこの地に突如、強い地震が襲った。その騒ぎのなかで小貫の妻が死ぬ。余震の続く中で出水騒ぎが起こり嗽沢坑では沢山の怪我人が出、葬式が続いた。りんはタンバン仕事を続けていたがある日の帰り、日三市に行った田所に呼び止められ、熱っぽく結婚を申し込まれる。りんは田所に激情を募らせながらこの鉾山やまを離れてはならないと思う。小貫は毎夜のように女中部屋に忍んで来ては迫り、逆らうと子どもの前でも狼藉に及ぶが、妻の四九日も済まぬうちに多吉を介して結婚を申し込んできた。小貫の欲情は執心となり嫉妬となり憎悪にまで高まっていた。りんは本気に田所との結婚を考え始めていた時、田所が事故で急死する。作り物過ぎる。

りんの運ぶ沈殿銅はひと荷一三貫、肩に食い込む重さだ。それを背に岩壁の七曲りを経てズリ山下のレール道からさらに精錬所へ。亜硫酸ガスをかき分けながら溶鉾炉の背後の板梯子を登り、炉の投入口と同じ高さの乾燥場に辿り着いてその荷台にあげ、すぐに戻る繰り返しが仕事だった。田所追慕の念から一瞬の油断があつたのか、七曲りの頂上にさしかかるところで酷暑から眩暈に襲われ、川底に落ちる。背中の一三貫が咄嗟の動きを封じた。ここまで担架が入れるだろうかと仕事仲間がたち騒いでいるところに小貫が駆けつけ、失神状態のりんを背にして走り去る。ほとんど死相を帯びていたりんを小貫はいたぶる。抗う力もなく、無人の飯場で無抵抗のりんに小貫は思いを遂げて満足し、「母親がこうなつたこと」を「童子共わらしよど」に教えておこうと思う。第一次世界大戦に日本が参加したことを校長が児童に誇らしげに話した日だった。

千太やひろ、そして親子以上に深い繋がりを持つ多くの仲間を支えられてりんは死を免れたがもはや働ける身体ではなかった。りんはタンバン場が恋しく、「そのまま働いた沈殿泥運びが恋しく、そのままに働いた嗽沢坑の鉾背負いが恋しく、そしてこの鉾山に嫁いで、はじめて働いた選鉾場が恋しくてならぬ」い。りんは千太たちの先生と元至誠会の仲間宛に、小貫にレイプされた屈辱の実相を訴え、歩行不能の自分に代わって止められている扶持米要求嘆願を頼む。仲間たちはりんの代理に千太とひろを連れて事務所に押しかけるが、既に解雇願いの手続きが小貫によって済まされていた。りんの容体が悪化。駆けつけた江藤・佐藤の両先生やみんなの前に手をついた小貫が、りん親子の面倒は自分が責任を持つと誓う。これまでの小貫像から納得しがたい描かれ方である。小貫を受け入れた理由を、小貫には自分たち親子を養う義務があるとしているが、説得力に欠ける。解子の母は三度目の夫との間に解子の義妹に当たる女兒を産んでいるが、その事実は他でも一切隠蔽されている。ここでも、小貫を三人目の夫としたことは膿化されている。そして五年の歳月が流れ、小貫は五年前と同じように飯場と精錬所働きを続けていたある日、庶務主任から呼び出されて、赤十字看護婦見習と師範学校の試験に受かっていたひろを事務所に出すように命じられる。

場面は変わる。この飯場にいるのもあと三日だ。秋田市の赤十字社に行き、先生が話してくれた「ゲンシ、ジョセイは太陽であった」と言った偉い女のように自分も太陽になるんだと、ひろは、残していく母の身を案じながら荷物をまとめていて、あっ！と去年の秋の出来事を思い出す。小貫が用事ででかけるといふ場所が、ひろに人権意識の種を蒔いてくれた鈴木トク先生の婚家先の地と知るとトク先生逢いたさから同行を頼む。六年ぶりで逢えた先生は優しく、ひろの心はふくらんだ。ところが、帰途の深夜の山中で突然、小貫に襲われたのだ。あらん限りの力で牙を逃れたもののこの時の恐怖は生涯忘れられないトラウマとなる。義父に襲われたのは事実だが状況は変えられている。この鉱山で生きる限り事務所勤務は拒否できない。怒りと口惜し涙にかき濡れていたそこに小貫の事故死が知らされる。これも虚構。ひろは事務所勤めに出ることを決め、出勤の初日を迎えたところでこの作品は終わる。

「おりん口伝」にとつてこの母子伝は不可欠の作品だが、かなり冗長で創作性も多く、それが必ずしも効果をあげているとは思われない。小貫はりん親子にとつてどんな存在だったのか。暴力性も緩和され、早々と死なせている。モデル小貫の実在人物に妻はいなかったという。鉱山で働く労働者の近代から見放された厳しい現実より、人権意識に目覚めた民衆の闘いの姿を描くことに、作者の意図が先行した作品になっている。

### 『桃割れのタイピスト 続 おりん口伝』

「小貫親爺おとさん」が急死した翌日、初出勤したひろは既に出勤簿に名前が載っていたことに驚く。タイピストと言われていたが職位は小使이었다。鉱夫たちにとつて事務所とは恐怖と憎悪の象徴である庶務課の窓口でしかなかったが、ひろは今日から飯場長屋とは雲泥の差の綺麗に掃除された部屋で、垢や汗、亜硫酸ガスや坑内臭の染みついた風の住み処とは別世界の、背広に皮靴、気分の悪くなるほどポマードの匂いの充滿した、人種の違う高級な人たちの中で働くのだと思うと、緊張感が体がこわばるのだった。タイピストである前に小使いとして七時半に裏口から入り、社員の出勤前に掃除や片付けを済ませ、出勤した社員にお茶を配り、暖房の火鉢を整え、他には事務所に届く新聞・雑誌類の整理もひろの仕事。ひろの直属の上司上島庶務主任は大学出で、最近東京から綺麗な「奥さん」が来たと評判の人だ。この主任からタイプライターの使い方を教えられ、「三菱鉱業株式会社荒川鉱山」と印刷された、ひろがこれまで見たこともない立派な用紙と活字表を渡され、まず三千字の漢字を覚えるように命じられる。読めない漢字が結構多いが怖くて訊けない。一九二〇年四月一日のことである。『女子文壇』によると明治末年頃からタイピストの需要が急速に増えて、東京神田に養成所が創設されたが卒業をまたず引き抜かれる者も多く、女性にとつて憧れの職業だったとあり、初任給は一五円から二〇円が相場で半期ごとに賞与もあり個室が与えられる場合も多かったという。だが、ひろの給与は鉱夫米一升分の日給二〇銭で月になると五円六〇銭から八〇銭だった。事務所は、高等小学校で優等生だったひろを安上がり狙ったのだ。千太は高小卒業後製錬夫となって製錬現

場で、スナカス（からみ）の堆積（やま）にシヤベルをつきたてトロにつめる重労働に従事していた。二二歳でこの<sup>やま</sup>鉦山（やま）に来て四二歳になった今、りんはようやく親子水入らずで長屋住まいのできる幸福感に浸れて酔いしれるのだった。

未知の機械におろおろし、与えられた文書をタイプに打つ作業に汗みどろで格闘するものの間違ひも多く、「和田、お前、ばっかでないのか」と怒声を浴びせられる屈辱から脱出できたのは一年後だが、すると、自分の打つ本社や仙台鉦務署などへの報告や通知の中身の欺瞞に対する驚きと怒りが湧きだし、それは資本主義社会の本質を知ることにもなり、藤田たちの二世仲間たちへの情報提供者としての役割を担うことにもなっていた。ここに来た当初、うっとり仰ぎ見た高級な種族が一転して鬼となる、事務所がランチ場に早変わりする場面を救えきれぬほど目前で見ることにもなった。巡視に盗伐が見つかり引たてられてきて主任たちに息も絶え絶えの血だらけにされて放りなげ出された人が、尋常科を出てすぐ坑内入りした、ひろと同級生だった竹下の父と知った時は凍り付く思いだった。顔色も変えずに平然と残酷なランチを繰り返す事務所の人たちへの憎悪が滾るにつれて、ひろのここを辞めたい思いは募っていった。このランチ場面は竹下ではなく、解子の義父であったことがより詳細に自己語りされているので、既にそれを読んでいる者にとって迫力半減の感は否めない。

ベトナム戦争終結後のロッキード事件、部落解放人権闘争、米軍基地が惹起させる被害への訴訟多発、組合活動の盛り上がりなどのみられた時代が反映されている作品である。本好きグループの勉強会で吉野作造を読むなど、仲間たちの反権力への団結運動が太い横糸になっている。ひろは、母子が全幅の信頼を寄せている先生から女学校卒者と同等の学力があれば一年で正教員の資格が取れる制度のあることを教えられ、講義録による自学自習と夜学での先生たちの熱心な指導を受けながら女子師範二部受験を目指す。ここも前述と矛盾する。そろそろ、受験勉強が最終段階にはいろいろとする頃、連日、残業を命じられる。仕事の自身は鉦山共和会規約（案）を打つことだった。会費は、男は二〇銭、女と満一六歳未満の幼年者は一〇銭を毎月の賃金から差し引く仕組みで、鉦夫の吉兆禍福、入・退山時の見舞金その他に当てる労働者の「扶助」団体というが、会長・副会長・顧問には社員が当たることになっていた。やがて、音もなく鉦夫たちは生活費を差し引かれた残りの僅かの賃金からこの会費を差し引かれることになる。打ち終えて思う。自分は女だから一〇銭とられるんだ、でもこれが「労働者ニヨル」「労働者ノタメノ」会と言えるだろうか、と。主任からハラスメントを受ける場面の挿入は読者サーピスか。なくもがなの場面だが、知識欲旺盛なひろ像として、新聞・雑誌類の整理を役得として社会の動きを知り、庶務主任席の背後の本箱に雑然と置かれていた文学や評論書を隠れ読みのできた悦びの描写は効いている。

何処から入手したのか「極秘」印の押された「全国鉦夫組合設立宣言書」を二〇部至急刷るように命じられる。「秘」や「極秘」文書を刷らされたことなどなかったことから、鉦夫の運動弾圧の緊急資料と察し、ひろは余分に一部刷って隠しもちだして兄たち仲間に見せる。仲間にはひろが心を焦がしている横沢もいる。幾つかのラブロマンスも周到に書き込まれていて小説創りに工夫をこらした跡が見える。会社が機械導入の近代

化を図っていることから労働者の大量クビ切りを図っていることを知る。三菱財閥が中国にまで手を伸ばしていることも知る。知り得た情報を届けることはひろの横沢への愛情表現の一手段でもあった。大正一二年の年が明けた。この鉦山に「全国鉦夫組合」の波はまだ寄せてこないが会社は先手を打って抵抗分子を離散させた。千太はナベクラに横沢は焼き場の沢方面に飛ばされることになったのだ。

二月、女学校卒業予定者とは一人別立ての試験を受けたひろは感触から不合格を覚悟し、屈辱感にまみれながら、坑内働きでも何でもいいから雇って欲しいと頼んで喰い者になっていた。だが、ひろは師範に合格した。みんなが我がごとのように悦んでくれ、祝いと労働現場の散り散りに屈せず「団結!」「解放!」の闘いの結束固めの会が盛り上がりを見せていた時、事故だっ!坑内だ!一七番坑だ!ハッパだ!またも嗽沢だ!の叫び声。頭や胴がばらばらの幾つもの遺体を囲んで慟哭が周囲の山に響いた。そこには父を殺された竹下の嗚咽する姿もあった。

ひろが秋田市に経つ日が近づいたある日、横沢に真剣に恋するひろの心情を知る千太が横沢と隠れて会う機会をつくってくれた。横沢はひろの恋情を知らない。秋田市に行くひろへの運動に関する秘密の手紙を届ける依頼のためだったが、ひろの恋情は横沢にも通じて、ひろが荒川を去る前にもう一度会おうと誘ってくれる。ひろは歓喜し、頼まれた二通の手紙をしっかりと高鳴る鼓動の下に押さえながら家への道を急ぐところで終わる。

## まとめ

『おりん口伝』が松田解子の代表作であるの評価は不動のようである。確かに文学賞二賞を受賞し、舞台化され、二〇〇一年には母校跡地に建てられた郷土資料館・大盛館内に松田解子文学記念室が開設され、敷地内には巨大とも言える「おりん口伝」碑が建つ。一本にまとまった時の前掲「あとがき」に見られるように「馬に一駄」の庶民の女の苦悩を描くことが当初の執筆意図だっただろう。「馬に一駄」はなんと象徴的な表現だろうか。庶民は庶民でも字義その通りの庶民ではなく、いわば一般的な庶民にとってもうかがい知ることのほとんどない東北の一銅山の鉦婦の生活世界なのだ。女に人格権が認められず、上下左右から打たれながらそれを堪え凌ぎ、時に抗いながら、男以上の力で生き抜いてきた女はゴマンといた。とりわけ下層であればあるほど、それほどの力がなければ生きていけなかった。明治および大正期、特に明治期における鉦山労働者の労働は苛酷で、しかし、正当な対価は支払われず、飯場制度による中間搾取の介在でいっそう奴隷的境遇に置かれていた。知らなかった、知らなかった、こんな世界があったとは、が私の率直な「読み」の第一印象だった。その意味から、このような生活を余儀なくされていた人々のいたことを、知らない多くの人々に知らせた功績は計り知れず大きい。男性作家による鉦山、鉦夫を描いた作品は必ずしも多いといえないまでもあるが、女性によってここまで深く書かれた例はないだろう。いささか過褒な表現を敢えて使えば、日本近代文学史上の一ジャンルに金字塔を打ち立

てた作品と言えるかも知れない。だが、『おりん口伝』だけでは、他で何度も語り書いていて、私自身、解子から直接に何度か聞いた、おりんに擬した母の人生の徴表とされた三度の結婚と三度目の夫の暴力性が描ききれていない。三部作の全体にわたっても描き切れていない。中途半端なのだ。続編となる二作には、『おりん口伝』にあった迫力に希薄さが見られる。事実と虚構が一体化されず隙間がある。縫合の跡が見えるのだ。それは、「あとがき」のなかで怒りをこめて「こんにち大独占資本とよばれる階級の頭部が、おりんたちの生き凌いだ鉦山をどう支配し、なにによって権力そのものと抱合しつつ侵略戦争から侵略戦争への、残忍な利潤追求をつらぬいてきたかということだったのです」という作者の思想的、政治的な強い意志が働いたためであろう。おりんやその同志たちの実像を越境した英雄仕立ては、作者の強い意志、意図を逆に殺ぐことになってはいないだろうか。アンソロジーへの収載及び現在刊行中の自選集を別にして、生前、松田解子は三六冊もの単行本を出している作家である。ここには未収録の作品もなおあり、短篇にはいいものが多い。これほどの創作活動を続けながら、自ら「足家」と称するほど、反戦・平和、人権運動の先頭に立って歩き回り飛び回った行動の人だった。富裕を求めず、貧窮に甘んじて人との繋がり大切にしている人だった。それは鉦山労働者の一椀の粥も分け合う裏表なしの人間関係に育まれた弱者互助の牢固とした人権平等思想の実践者だったからと言える。喫緊の政治的課題である無辜の人々殺傷に加担の危険性を孕む自衛隊による給油活動や原発の驚かされる事故隠し、ワーキングプアを多出させている格差社会問題、その他今日が抱え持つ、普通の人々が普通の幸せな生活を営む上で離反した現況だからこそ、これらの問題と連結した松田解子の人と文学は注目されなければならぬと思う。